

早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

概要書

在日中国人ニューカマーと教育  
—非集住地域に着目して—

Education of Chinese Newcomers in Japan: With a  
Focus on a Less Concentrated Area of Chinese  
Residents

2017年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

劉 昊

LIU, Hao

研究指導教員： 森本 豊富 教授

## 問題の所在

1980年代頃よりニューカマーと呼ばれる外国人が増加し始めた。ニューカマーが定住するにつれ、かれらの教育問題に対する学術界の関心も高くなった。そして、社会学、文化人類学、教育学などさまざまな分野で研究が蓄積されてきた。しかし、ニューカマーの教育に関する研究は、外国人が集住している地域で行われており、非集住地域に焦点があてられることはほとんどなかった。外国人集住地域は行政の関心が高く、外国人に対する政策が多くある。エスニック・スクールやインターナショナル・スクールなど活用できる資源も比較的豊富である。また、同胞が多い地域に住む者は、大学進学や就職で成功している者を子どものモデルに据えることも可能である。一方、集住地域に比べて、非集住地域は活用できる資源が相対的に少ない。そのため、ニューカマーたちの教育実践も集住地域とは異なると推測される。そこで、本稿では非集住地域に居住するニューカマーの教育のあり様を、中国人ニューカマーを事例に描き出した。その際、本稿では「主体性」と「育ちの過程（ルート）」に着目した。

## 調査概要

本稿では、2013年から2016年にかけて、P県Q市及びその隣接地域（以下、Q市）で断続的に行った半構造化インタビューで得られたデータを用いた。調査対象者は、Q市に居住する中国人ニューカマー19名に筆者を加えた計20名である。サンプリングは、筆者が幼少時から親交のある中国人ニューカマーを訪ねる方法と、インタビュー対象から別の対象を紹介してもらうスノーボウルサンプリングを併用した。調査対象者と筆者は筆者の幼少時から親交があり、家族ぐるみの付き合いをしている者もいる。したがって、対象者とのラポールは十分に形成されている。場所は喫茶店や筆者宅、対象者宅、レストランであった。それぞれのインタビューは1時間から3時間であり、対象者の希望や言語能力にあわせて、中国語と日本語を使い分けた。インタビューはボイスレコーダーに録音した。また、第4章ではオートエスノグラフィーの手法を用いた。そのため、筆者自身が対象者となる。そこで、過度な主観を抑制するために、ニューカマーの教育を専門とする研究者にインタビューをしてもらう方法を用いた。

## 各章の概要

序章ではまず、ニューカマーがどのような背景で登場したのかを概観した。そして、ニューカマーの教育に関する研究、とりわけ非集住地域に着目する必要性を述べた。また、ニューカマーの教育をめぐる研究の流れを概観した後、課題設定をした。すなわち、先述した「主体性」と「育ちの過程（ルート）」に着目する必要性を述べた。そして最後に調査概要と本稿の構成を述べた。

第1章では、在日中国人の歴史を概観した。具体的には、オールドカマー（戦前に来日した人々お）とニューカマーに大きく分けて概観した。オールドカマーの歴史については、日中貿易がかれらの出現に大きく関わっていることに言及した。そして、かれらが築き上げた3大中華街（横浜、神戸、長崎）に触れた。一方、ニューカマーの歴史については、中国の開放政策以降に多様性に富む中国人が来日したことを確認

した。そして、なかでも大きな比重を占める留学生と中国帰国者に焦点をあて、その歴史に言及した。

第2章では、非集住地域という環境で、母親たちが主体的に行使する教育戦略を描き出した。その際、彼女たちのライフストーリーと、日本の学校に対する意味づけに着目した。その結果、日本の学校を否定的に意味づけながらもさまざまな戦略を駆使して教育達成を目指す者、肯定的な意味づけから、日本の学校を戦略的に利用する者、家族団らんのために、否定的な意味づけをする日本の学校をあえて選びとる者など、「創造的教育戦略」とも呼べる多様な戦略を展開する母親たちの姿が明らかになった。

第3章では対照的に、中国との関係性の不在に着目し、子世代のホーム意識を明らかにした。そこで明らかになったのは、次のとおりである。第1に、かれらはいじめなどによって「中国人」としての自己肯定感の喪失し、自らホームとしての中国を切り離していた。そして、日本をホームとして希求していた。第2に、中国もかれらの心に生きていた。しかし、さまざまな壁によってかれらはホームとしての中国から切り離されていた。そして、第3に、「帰属を感じるホーム」としての中国と「将来展望を望めるホーム」という一枚岩ではないかれらのホーム意識が明らかになった。

本稿では、主体性に注目して考察をしてきた。一方で、非集住地域では、その主体性も限られたものであることに注意しなければならない。こうした問題意識のもと、第4章では、筆者のオートエスノグラフィーを通して、非集住地域に住むニューカマーに1つのロールモデル（ルート）を提示した。そこで描き出されたのは、学校の教師や両親、居場所との関係性のなかで築き上げた筆者の主体的な自己実現の物語であった。例えば、学校の先生は、人生の節目で筆者に目標や導きを与えてくれたし、両親が苦勞する姿は筆者の使命感を呼び覚ます契機の1つとなった。また、人権会館という居場所の存在によって、辛い時でも筆者はルーツに対する自己肯定感を失うことなく成長することができた。さらに、筆者の自己実現において母親の教育戦略も大きな役割を果たした。

最後に結論では、第2章～第4章で明らかになった知見を振り返った。そして、今後の課題として、属性の多様性や世代の違いへの着目、教育戦略における親子間の相互作用に着目する必要性を述べた。

## 本稿を構成する論文

劉 昊. 2015. 「外国人散住地域における在日中国人ニューカマーの『創造的教育戦略』」, 『移民研究年報』 21号, 139-156.

劉 昊. 2016. 「非集住地域における在日中国人ニューカマーのホーム意識—中国との関係性の不在に着目して—」, 『21世紀東アジア社会学』 第8号, 92-106.